

2012年10月28日 「神の使命に生きる喜び① 礼拝」

今日から四回の主の日にわたって、勝田台教会のヴィジョンを分かち合うためのテーマ説教をさせていただく。今日も会員懇談会で、来年以降の五カ年計画・新しい教会組織について話し合うが、それはすべて今日からお話しする5つの使命を具体的に実現していくための手段。「礼拝、愛の業、伝道、まじわり、教育」私たちの教会は、神から与えられたこの5つの使命に生きていきたい。そしてこのことを、すでに会員になっておられる方々だけでなく、客員の方々や求道者の方々を含めた、勝田台教会に連なるすべての皆さんと共に確認させていただきたいと願って、こうして礼拝説教で語らせていただくことにした。私たちの教会がどこに向かって歩もうとしている教会なのかをしっかりと知っていただいて、そして願わくは、この教会のメンバーに加わっていただいて、一緒にヴィジョンを追い求めていきたいのです。

そういう祈りをもって説教をさせていただきますが、まずその前に、今日は宗教改革記念日礼拝であることを覚えていただきたい。10月31日は宗教改革記念日です。1517年のこの日、マルティン・ルター（1483-1546、ドイツ）が、ヴィッテンベルグ城教会の門扉に「95か条の提題」を張り出し、ローマ教皇庁に公然と抗議しました。この改革運動が全ヨーロッパに広まり、カトリック教会に対してプロテスタント教会が生まれた。このルターが打ち立てた宗教改革の三大原理は、私たち改革派教会を含めたプロテスタント教会すべての共有財産です。それは①聖書のみ。ローマカトリック教会は様々な迷信、伝説、伝承を、教会の教えとして大切だとしてきた。でもそれらは、魂の救いに必要ではない。必要なのは旧新約聖書に記された神の言葉だけだ。聖書のみで忠実な教会であらねばならない。そして、そうやってただ聖書だけを丁寧に読んでいった時に発見したのが②信仰義認の教理。聖書のみに対して、信仰のみと言ってもいい。ローマカトリックの教えでは、善行を積み上げることで、罪から救われると言われてきたが、聖書にはそんなことは書いてないのです。人間というのはどれだけ善行をなしても決して完全に清くはあれない。ただイエス・キリストの恵みによる救いを信じて救いに入れていただくことしかできないし、信じるだけでいいと書いてある。このことをルターは発見した。こういう信仰義認と、聖書のみ、この二つは有名。

でももう一つが忘れられがち。でも、ヨーロッパ世界を根底から覆すのもっとも威力を発揮したのは、実はこの三つ目の原理なのです。だからもっと思い出されるべき。それは、③万人祭司。どういうことかということ、祭司というのは、人々に代わって神殿でいけにえをささげたり、祈りをとりなしたりする特別な職務として、旧約時代に立てられていました。ローマカトリック教会は、そんな旧約時代をそのまま引きずるようにして、聖職者叙階制度を打ち立てまして、特殊な宗教的身分としての司教・司祭と、一般信徒を区別しました。そして、この司教団を通してでなければ、神様と交流することができないと教えたのです。でも聖書にはそんなことは書いてないとルターは発見したのですね。特別な一握りの祭司階級だけが神様と交流できるなんて、もう古い時代のことであって、イエス・キリストによって開かれた新しい時代においては、すべての人が祭司として、神様と直接交流することができるのだよと、ルターは

聖書から発見したのです。それは、信仰においてすべての人間は平等だという発見です。それまでは、ローマ教会の司祭たちが、特殊な宗教的身分として神を独占していました。でも、そんな制度は不必要だ。信仰においてすべての人は平等であって、すべての人がただイエス様だけを通して直接神とつながることができる。こういうすばらしい発見をしたのです。これが万人祭司の原理。

そしてここからがポイントなのですが、そのようにしてすべての人が平等であるということは、すべての人が同じようにイエスの弟子なのであり、神からの使命に生きるようにと召されているということでもあるのです。一部の司祭たちだけがイエスの弟子なのではないのです。あるいはプロテスタントの場合でも、牧師だけが、長老だけが弟子としての責任があるわけではないのです。キリストに直接つながる私たちすべてが、イエスの十字架の愛に応答する責任があるのであって、神からの使命に生きるようにと一人一人がひとしく召されている。こういう万人職務という原理へと、さらに発展していった。

この万人祭司・万人職務という宗教改革の大発見こそが、私たちの教会形成を考える際の根本原理なのです。そんな原理は無視するというのであれば、なにもこんな風に教会全体でヴィジョンを確認する必要もありません。キリストの弟子として責任があるのは牧師だけ、あとはみんなお客さんで、牧師がサービスしてくれるものを受けただけということであれば、牧師だけが神からの使命を確認していればいいのです。でもそうじゃない。信仰においてすべての人が平等なのです。一人一人が、神との一対一の責任ある関係において、信じ、従い、決断し、行動する権利と責任を持っているのです。だからこそ、教会「全員」でヴィジョンを共有することが必要なのです。

そのことを確認させていただいたうえで、いよいよ私たちの教会に与えられているヴィジョンである「5つの使命」を考えていきたい。小会では「5つの使命」と「10のこうありたい」というヴィジョンを掲げたが、それは決して別物ではなく、5つの使命に生きる理想的な教会のイメージを言葉にしたのが「10のこうありたい」。また機会を見て、「10のこうありたい」についても詳しくお話したいが、今回は「5つの使命」にしぼって説教させていただく。

「礼拝、愛の業、伝道、まじわり、教育」という5つの使命。使命などというと重苦しく思われる方もいるかもしれませんが、言い換えるならば、なぜ私たちの教会は存在しているのか、どうしてこの勝田台教会が産み出されたのか、そして今もこの地に置かれつづけているのか。そういう問いに対する神様からの答えが、この5つなのです。10月度月報にも記しましたが、私たちの教会は、神の深遠な救いの御計画と歴史の中で、神によってこの勝田台の地に生み出されたのであって、それはこの教会を通して人々が救われ、勝田台の地が清められ、神に栄光が帰せられるためです。言い換えれば、この教会を拠点として、世界の作り直しが始まっている。愛と真理と正義の神の国は、この教会から始まります。そういう神の偉大な御計画のもとに、この勝田台教会はこの地に興されたのです。そして、そういう偉大なご計画を実現するために、私たちは何をなすべきか、神は私たちに何を望んでおられるのかといえば、答えはこの5つで

あると、聖書には明確に示してあるのです。

どうやってこの5つの使命を導き出したかと言えば簡単です。イエス様が教えてくださった最も重要な掟と、第宣教命令、ごくごくシンプルにこの二つの命令に聞き従いたい。この二つの命令からくみ出されるのが、この5つの使命。単純であり、覚えやすいということも、このヴィジョンの一つの特徴です。小学生でも分かるということをおねらって、こういうシンプルなヴィジョンを掲げた。一部の人だけ分かってもしょうがない。子どもも含めた教会全員で。

その第一にあげられるのは、礼拝です。わたしたちは礼拝するために存在している。どうしてそう言えるか。神を愛しなさいと命じられているからです。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟であると主は教えてくださいました。神を愛する、それこそが人間の本源的な目的であって、人間はそのために創造されたと言ってもいいのです。

創世記には人間は神のかたち(イメージ)に創造されたとあります。これはどういうことか、たくさんの議論がありますが、まず第一に、神と心を通わせあうことのできる霊的存在としてつくられたということが言われているのは確か。神に呼びかけられ、神を呼ぶ、神に祈り、神を礼拝し、神を愛し愛されるという、そんな風に神と向き合うことができるのは人間だけ。神は愛であると聖書にはあります。わたしたちが神の形につくられたということは、その愛である方=神に似る、愛なる者、愛することのできる者として作られたということです。そして、そういう愛なる者としてのわたしたちと、互いに愛し合うことを神は何よりも喜んでくださるのです。そのように私たちと愛し合うためにこそ、神は私たちを創造されたとさえ言うことも可能です。思い出すのは、娘が話ができるようになった時に、妻が言っていたこと。話が通じるといのが本当にうれしい。話が通じるといにはまだおぼつかない幼子ですけど、今までは泣いて寝て食ってと母親に全面的に依存して、逆に言えば母親の言いなりに生きるしか術がなかった赤ん坊が、コミュニケーションできるようになる。母親と違う人格として立ち始める。それはある意味でさみしいことなのかもしれませんが、妻にとっては本当にうれしいことだった。神様と私たちの関係というのも、少し似たところがあるかもしれないと思います。私たちも、神様と話が通じるといにはとてもおぼつかない、御心がわからずに右往左往しているような者たちですが、でもそんな私たちと心を通わせあうことを、神は何よりも喜ばれるのです。私たちはそんな風に神に向き合う神の子として、自分の意志で神を愛し愛されるものとなることを期待されて、大きな喜びの中でこの世界に生み出されたのです。だからこそ、神を愛することこそが最も大切な第一の掟と教えられているのです。

そして神への愛をあらわすための最も中心的な手段こそ礼拝です。もちろん愛には色んな表現があります。でもマルタとマリアのことを思い出せば、よく分かると思います。イエス様に最高のおもてなしをしようとしてせわしなく気を配っているマルタ。そういうマルタのもてなしをも、ご自分に対する尊い愛の行いとして、主は喜んでおられたことと思います。でも、イエス様は教えて下さったのです。そんなにたくさんのもてなしは必要ないのだ、私が求める最上

のもてなしは、あなたが座って私の言葉を聞くことなんだよと教えて下さったのだと、私は理解しています。だいたいイエス様という方は、仕えられるためではなく仕えるために来てくださったと言われる救い主です。命を捨てて、救いを与えてくださる方。そのような方が、大仰な奉仕によってもてなされることをお求めになるわけありません。イエス様が望まれるのは、全存在をかけて御言葉に聞く。今ここでのイエスとの一期一会の出会いに、その一瞬にすべてをかけて、彼を見上げる、神を見上げる。そして命の希望を受け取るのです。慰めと励ましを受け取るのです。幼子のように御言葉を受け入れて、救いにあずかるのです。それこそが、私たちが毎週の礼拝において繰り返していることのもともともあります。そういう心からの礼拝こそが、イエス様をもっとも喜んでくださるおもてなしであり、神への最大の愛の表現なのです。

そんな風にして私たちは、神を礼拝することによって神を愛するのです。そのために、この教会は存在しているのです。まあこういう風に言いますと、一生懸命礼拝しなくてはならないと義務感を強く覚える方もおられるかもしれない。でも、実際礼拝生活を送りながら私たちが覚えている実感は、そういう義務感よりもむしろ、これがあるから生きていけるなあという喜びではないでしょうか。しばしば申し上げますが、私たちが礼拝を守るのではなく、礼拝が私たちを守ってくれているのです。私は本当に幸いな牧師で、日曜日の礼拝を心から喜んでおられる信徒の方々の喜びの声を、しばしば耳にさせていただく。「先生、今日も御言葉をありがとうございました。先週はまた落ち込んでしまったけど、気持ちがりセットできました。また一週間がんばります。」「先生、私は今、この日曜日の礼拝が生きる支えです。体は年を取って億劫なことばかりだけど、日曜日が楽しみだから、今週もがんばって生きていたいと思えます。」そんな言葉を聞くのは、牧師冥利につきます。ネヘミヤ 8:10「主を喜び祝うことこそ、あなたがたの力の源である。」本当にそうです。礼拝が力の源。一週間の旅路のエネルギー源。

そんなことを思いながら、最後に、私たちにとってこの礼拝の日曜日とはどういう日であるかを覚えて終わらしましょう。四つのことを申し上げます。

1. 神の憐れみ・慰め・平安の中で、みんなで安心して息をする日。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。(マタイ11:28)」

2. 福音（主イエスの十字架と復活）によって、希望の中によみがえる日。

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。(1ペテロ1:3,4)」

3. 命を与えたもう『生けるまことの神』の臨在を覚え、賛美の声をあげる日。

「新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。主に向かって歌い、御名をたたえよ。

国々に主の栄光を語り伝えよ／諸国の民にその驚くべき御業を。(詩篇96:1、3)」

4. 勇気を得て、キリストの弟子として世（新しい一週間）に遣わされる日。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。(ヨハネ 16:33)」 「イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』(ヨハネ20:21)」

この礼拝の日曜日の祝福をみなさんが豊かに味わうことができるように、私は全力で説教奉仕をいたします。また礼拝全体を司ります。牧師としての職務として。みなさんも協力してください。聴く者の集中が、説教者を高めます。みなさんの礼拝への集中が、礼拝全体の質を高めます。

そしてみんなで、この礼拝の日曜日を、存分に喜び楽しみましょう。そうすれば、神もまた喜んでくださいます。礼拝において天国の宴が先取りされ、礼拝において終わりの時の完全な慰めが先取りされます。そして、そんな喜びに満ちた礼拝がなされるならば、たくさんのまだ見ぬ神の民が、必ずここに集められてくることでしょう。そして訪れる人々が、ここに確かに神がおられる、イエス・キリストは生きておられると、おののいて、ひれ伏すのです。そんな礼拝をなすために、私たちの教会は、この地に生み出されたのです。